

るものにて、十一月還城と載せたる記録は、皆同じく三壺記に據りて記せるなるべし。又三州志來因概覽附録に云ふ。亞相公夜話録に、金城西丸に村井豐後城代してある頃、公京より下向、八月六日に光臨、豐後手自ら茶を点じて獻じ、公も亦手自ら茶を点ぜらるゝこと見ゆ。有澤永貞の夜話録の頭書に、金澤の御城西丸、初めは村井豐後今の三丸の内に居住のよし。次第に御城中廣くなるにつき、今の權現堂の建ちたる所村井氏屋敷の由。とあり。此の文義通ぜず。然れども豐後此の頃西丸に在りし事明了なり。又永貞の註に、此の御成は文祿四年か慶長元年二月の頃なるべしと云へり。三壺記には、此の事を天正十九年とす。又云ふ。二丸に今數寄屋第の遺號あり。此の地は、今二丸後堂の奚婢居房追々建出し、纒かの地面なり。數寄屋第の遺號に因れば、古への茶寮の地なるか。村井豐後手自ら茶を點じて之を獻じ、國祖も亦手自ら茶を点ぜらるゝ事、公の夜話録にあれども、その文に西丸とあれば、此の第には非ざるべし。といへり。按ずるに、村井氏の第、度々そのヶ所を移轉せしゆゑに、古來城内に於ける第地の論區

々なるにや。

○長九郎左衛門舊第

信連記に云ふ。慶長五年大聖寺陣事濟みて、九郎左衛門連龍屋敷金澤御城西丸に渡りて作事をいとなみ、息男十左衛門元連に利家卿の姫君御福様を御婚儀あり。連龍の悦び限りなく、則ち御意にて連龍は如庵と改稱し、能州館の濱へ隠居す。十左衛門元連は天性器量ゆゑしく、文武に勝れければ、利長卿一入御大悦被成、御用被仰付也。と可觀小説にも亦記載す。三州志來因概覽附録に云ふ。我が國祖金澤入城、本丸の便殿に御座あり。此の頃の事か、長連龍第も本丸にあり。有澤武貞の享保甲寅筆記に、長如庵第本丸にありしに、新宅出來の時、其地狭しとて、如庵へ今の第の家作を命ぜらる。とあり。又武貞の説に、慶長五年大聖寺陷城の後長如庵へ西丸にて第を賜ふとあり。按ずるに上文武貞の説に、慶長六年如庵本丸の第を退き、今の長氏第へ家作とあれば、茲に云ふもの的せず。といへり。平次按ずるに、右は武貞の誤説に非ず。富田氏の僻按なるべし。武貞の金澤細見圖譜に、元和以後回祿に依りて御城中も繩張

少々違ひ、後年御本丸狭きとて二御丸に御新宅出來。此時長如庵連龍も今の屋敷の家作あり。其の以前二丸に長氏の屋敷在りたりと記載す。富田氏此の文をば見誤りたるもの也。利家卿天正十一年入城以來、本丸を居城となし給ふにより、二三丸或は西丸・北丸等に大身の諸士の第地を賜ひ居住すといへども、本丸の地に居屋敷を賜はりたる事は舊記等に所見なし。長連龍に本丸にて第地を賜ふべき由なし。然るに三州志に、長如庵第本丸にありと載せたるは、全く富田景周の誤りなること著明也。慶長の金澤城古圖を見るに、三丸石川門の傍なる後の異風稽古所の地に、長九郎左衛門・三輪志摩・横山山城三人の第宅なるよし記載す。されば長氏の第初め三丸なりしかど、慶長五年に西丸にて賜はり、三丸より西丸へ移轉せしか。長家傳には、慶長十六年九月長十郎左衛門好連歿し、同年好連の弟連頼家督を繼ぎ、翌十七年長町の第地を賜はると云ふ。或は云ふ。長町の第地は如庵の隠居屋敷にて、即ち如庵拜領する處なりしを、後本第となし、世々居住すといへり。慶長五年に城内西丸にて第地を賜はり、作事をいとむといふ

こと、長家記には記載せずとぞ。

○西丸等諸士舊第圖

次に掲げたる西丸の諸士第地は慶長の金澤古圖を以て裁記す。此の圖は慶長の末頃の圖なれば、長氏は既に西丸を退去し、其の舊第地をば、近藤大和・上坂又兵衛の居第に賜はりたる時なり。右兩士の第地は則ち西丸にて、今云ふ玉泉院丸の地なる事、此の古圖にて著明なり。山崎長門・桂卷隼人の第地は北丸なり。桂卷隼人とあるは葛卷隼人なり。近藤大和は、三州志來因概覽附録に云ふ。近藤大和長廣、采地一萬三千石。慶長十年十一月大聖寺城の城代横山因幡長秀病死するに依りて、大和長廣を大聖寺城に置かる。同十六年長廣病死、其の子甲斐之に居す。同十九年浪華出役にも、公甲斐を留めて大聖寺城を守らしむ。坊本爲近藤大和。又爲津田道供。並誤。又三州志隴囊餘考に云ふ。近藤甲斐、實名不詳、一萬千七百石也。青山譜に、慶長十九年浪華役。青山豐後・近藤大和二人守越中魚津城。此説非也。とあり。又上坂又兵衛は、三州志隴囊餘考に云ふ。采地七千石にて、銃卒百人の將たり。銃術に達す。俗本六千石に作